

【用語】松平右近將監―館林藩主、松平（越智）清武 玉目―鉄砲の玉の重さ

【解説】館林通り（日光臨往還ともいう）は、武蔵国忍城下（埼玉県行田市）から利根川を渡船で越え、さらに館林城下から渡良瀬川を渡つて下野国佐野の天明宿（栃木県佐野市）で日光例幣使道に合流する道筋である。元和三年（一六一七）三月、徳川家康の遺骸を日光へ改葬したときの道でもある。この道筋で利根川右岸の武蔵国側に設置されたのが新郷・川俣関所である。創設年次は定かでないが、寛永期以降は代々忍藩が管理し、日常の通行改めは四人の定番が交替で務めた。

この文書は館林藩の越智松平家が江戸から館林へ鉄砲一〇挺を搬送する際の家老発行の関所手形で、数量と玉の重さを記載するのが一般的であった。川俣関所の鉄砲改めは享保十三年（一七二八）四月、將軍吉宗の日光社参を契機に確定し、事前に忍藩の江戸屋敷へ申告すること、六挺以上は領主発行の証文、それ以下は家来の証文、一〇挺以上・玉目二〇匁以上の大筒は幕府老中の証文が必要であった。なお、ここは三国街道の杓ヶ橋関所や日光例幣使道の五料関所と同様に河川の渡し場でもあり、川固めの関所として利根川を上下する通船の監視も行っていたようである。